

里山グループ

阿部 和生

◆ 器機はいつも、ぴかぴか！

山は多様な顔を見せます。里山林の場合は、あくまで二次林ですから、手を入れること、人間が関わり合うことが必須です。教本では、そのまま放置し、自然の遷移に委ねるという選択肢も記されていますが、奈良県の里山林では常緑樹の繁茂する九州のような、下草の豊富な山林には戻らないといわれています。生物多様性に富んだ雑木林には、そのままの放置では戻らないということです。

県の里山林整備指導では、ソゴ、アラカシ、ネズミモチ、クロバイ、ヒサカキ、イヌツゲなどは伐採種として記載しています。下層植物ではネザサ、コシダ、フジなども記述されています。「ナラ枯れ」により半分に減ってしまったコナラ林は常緑樹がはびこり、ササが増えやすい環境にあります。特に「ササ」はいったん勢力を持つとその根絶には時間と多大な労力が必要になります。

高木樹を育てつつ、豊かな下草や灌木がある里山林に戻す努力がこれから必要です。

枝葉を始末するチップパー機の活用、刈り払い機の使用、鉋を使える技術、そうした事がこれまで以上に必要になると思います。

車を運転することは大変な事です。しかし学び、練習する事により安全を確保し、便利さ快適さを手に入れます。山林における各種の器機も、しっかりとした学習と経験の積み重ねにより作業が楽しく、きれいに仕上がり、活動の練度があがります。

鉋や大鎌、厚鎌などは、常に手入れを怠らず、「刃」を鋭くして使用する事が大切です。砥石で刃を立てる事が必要です。ノコギリは、使い捨ての替刃が主流です、やはりそれであっても使用後の手入れが大切です。

様々な器機は、いつも、ぴかぴか、新品同様であれば、作業はスムーズ、個人への負荷が少なく、安全です。作業終了後の後始末が次の快適な活動に繋がります。

里山の今**エコファームグループ**

青木 芳一

◆ 雑煮について

お正月の食事に欠かせない雑煮ですが、歴史は古く室町時代です。江戸時代に入ると庶民でも餅が手に入るようになり、全国的に雑煮でお正月を祝うようになりました。

餅の形、だし、具の種類にいたるまで、地方や家庭ごとに千差万別といわれています。東京風の雑煮には、すまし汁に鶏肉、小松菜、里芋、シイタケ、焼いた角餅、ユズを用いています。京風の雑煮は、白みそ仕立てで、大根、金時ニンジン、ヤツガシラ、丸餅は焼かずに柔らかくして入れます。私のふるさと横浜の雑煮は、すまし汁に鶏肉、小松菜、焼いた角餅、ユズ、大根、金時ニンジン、ヤツガシラを入れていました。岐阜出身の父のため、母が入れる具を配慮したのでしょうか。

雑煮の中には、縁起を担ぐめでたいものが入っています。餅は地域により、丸餅と角餅になります。丸餅は、この1年「角がたたず円満に過ごせますように」という思いを込めて食べます。角餅は、その昔武士たちが、戦いを前に「敵をのしてしまおう」と、のし餅を切った角餅を食べ始めたといわれています。

雑煮に入る具には、おめでたい野菜があります。(小松) 菜は食べる時、箸で菜を持ち上げ「名(菜)を上げる」とし、その菜を食べ残して「名(菜)を残す」とし、さらには「菜」と鶏肉の「鶏」から「名取り」となりました。里芋は、親芋から子芋が次々と増えていくことが「子孫繁栄」として入れます。大根の白と金時ニンジンの赤で紅白を表し、輪切りにすることで、円満となります。

野菜が縁起物とされる由縁は、大地のパワーを取り込んで生育しています。生命の源でもある大地には、その地を祭る神様が宿っていると考えられていました。

会員の皆さまの家庭の雑煮の中の餅、だし、具はさまざまでしょう。ならやまの畑で栽培された「めでたい野菜」を、お正月の雑煮に入れて食べたお味はいかがでしたか。

景観グループ

羽尻 嵩

◆タナゴ池の生物調査報告

○12月13日(木)近畿大学農学部の北川忠生先生と学生5名によりタナゴ池の生物調査が行われた。



結果は次のようになった。

- ・ニッポンバラタナゴ 19匹。タガイ 2個体。
シマヒレヨシノボリ約 50匹。

バラタナゴの数が少なかったのは、産卵の場となるタガイがザリガニの攻撃により激減したからだ。



○初め10個ほどだったタガイは、その後20個体ほど追加されたが、9月末には2個体となってしまった。死んだカイのカイガラにはザリガニによる攻撃の痕跡が残っていた。

○ザリガニは5月からの暑さ、特に5~8月の猛暑で大量に増え、大繁殖し、餌を求めてカイを食い荒らしたのだ。

今年はこの反省を踏まえ、ザリガニ捕獲と泥の除去に力を入れるつもりだ。



鳥シリーズ

小田 久美子

◆「一夫一妻の神話

妻を娶らば二羽以上」

子孫繁栄の願いは、生物共通の念願です。

洋の東西を問わず、世界のほとんどの国や民族での結婚の形態は、少なくともたてまえ上は、一夫一妻制です。鳥の世界でも一夫多妻や一妻多夫は稀ですが、鳥たちの多くが一夫一妻なのは決して道徳的に優れているという訳ではありません。

もし、あなたが結婚適齢期の未婚のメスだとします。けれどあなたの周りでは、良い場所に縄張りを持ったオスはすでに一羽のメスとペアになっています。独身オスは悪い場所にしか残っていません。「金持ち」の既婚オスの二番目の妻になるか、「貧しいながらも」一夫一妻を貫くか、乙女の思案のしどころです。さて、人間界では、女子を得るには見目の他にも権力と財力が優位と思われませんが、人間ならここでモラルというややこしいものが入り込みますが、鳥の場合は将来の繁殖成功のみが最重要課題です。そこで、当然「金持ち」の既婚オスを選ぶメスたちが現れます。

一夫多妻で良く知られているのは夏鳥のオオヨシキリです。オスは



イクメンの面目躍如。妻たちの巣をパトロールし、面倒見ながら他のオスを排除し忙しく鳴かなくては

なりません。日本の鳥の中で最も発達した多妻のチャンピオンはセッカ(12.5cm)です。その小さい体にもかかわらず世界に広く分布し、一羽のオスが平均5.6(最多18)個の巣を作り、その半分にメスが入ります。かくして独身オスが多くなってしまいます。

一方あぶれオスの方も、指を加えてばかりではありません。折りあらばその妻を奪おう、あわよくば一夫多妻になろうとしているようです。オスというものは元来、一夫多妻を目指す本能的な願望があるようです。